2024

HARVARD-YENCHING

INSTITUTE WORKING

PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN

Waka Aoyama | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険
Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of the chapters for an autoethnographic fiction titled *Fustuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual)*, scheduled for publication in 2027. From June 2024 to February 2027, approximately 20 chapters, including a prologue and an epilogue, are planned to be written in Japanese. The work is based on the author's personal experiences and follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese. The story portrays Alice's everyday use of multiple languages. While Japan is often misunderstood as a "monolingual society," the work shows that it is, in fact, a "multilingual society," and it challenges the concepts of "ordinary" and "equality" in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored, with a narrative of homeland loss and regeneration. The work encourages critical reflection on our unawareness of the privilege of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies we live with, aiming to bring out the reader's own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, it seeks to explore the possibilities of creating a socially just world. In order to prepare for the publication of a future English edition and to explore the impossibility of translation, English translations of all chapters are included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Being Ordinary/Normal and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約：これらのエッセイは、2027 年度に出版予定の『ふつうのマルチリンガル』という自伝的民族誌的フィクション作品の各章の初稿である。2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグ、エピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。本作では、著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が、日常的に多言語を使う様子を描く。日本が「モノリンガル社会」と誤解されがちである一方、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」を言語使用の観点から問い直す。多様性、共生、歴史的加害性、言葉の力をテーマに、故郷喪失と再生を描く。とくに「日本語」や「英語」の特権性や言語的ヒエラルキーに無自覚なわたしたちに対する批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を引き出すことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的公正な世界への可能性を探る一冊である。将来の英語版の出版に備えるために、また翻訳不可能性を探るために、全章の英訳を付す。

キーワード: マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつうと平等主義、歴史的加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所
青山和佳

0　プロローグ
フィリピンでアリスになる：マルチリンガルがありふれた国で

東京のキッチンでマンゴー

　明日、フィリピンに出発するのに、マンゴーを食べていた。それはタイのマンゴーだった。イエローというよりはオレンジで、すらりとしている。ひらべったいタネにそってスライスし、スプーンで格子状に切れ目を入れて数片ずつすくい、口にはこぶ。むすめのアテナが固まる。
「フィリピンのマンゴーよりおいしい、くやしい」
「マンゴーの味とか、くらべるの？」
「メキシコ人とかインド人のともだちと。マンゴーの一番おいしい国はどこか勝負」
「世界に五百種類以上もあるらしいし、くらべようがないじゃない」
「あのさ、もちろん、ただのじゃれあいだよ」

　わたしたちは日本語でしゃべっていた。マンゴー。東京にありながら、わたしのからだは想起する。ねっとりとした空気が肌にまとわりつくダバオの路上でキロ売りされている、ありふれたフルーツ。海岸沿いに住宅が密集したその地区には、小さなチャペルと大きなモスクがあり、ビサヤ語やマラナオ語がひとびとをつないだり、へだてたりしている。アテナのからだは、何を想いだしているだろうか。マニラの親族にかわいがられている。高い塀でかこまれた住宅地に露天商は入れない。エアコンがききすぎたダイニングルームで、フルーツのもりあわせをたべる。アテナはビサヤ語もタガログ語も話さない。いとこたちとは英語でたわむれる。

　わたしの名前はアリス。亡くなったパートナーからもらったニックネームである。フィリピンでは、ふだん、ニックネームで呼びあう。ニックネームであることを忘れるほど、ニックネームで呼びあうから、それはほぼ、そのひとが社会で生きるための名前といってよい。ニックネームは本名から想像できる範囲におさまることもあれば、そうでないこともある。たとえば、クリスティンがティンなのはわかりやすいだろう。ホセも（ペペやジョジョではなく）ティンというのは、わたしにはわかりかねた。もっとも、わたしのニックネームがアリスというのは、本名とはまったくかかわりがない。パート

ナーの愛する作家がルイス・キャロルだったから、というだけである。

パートナーは、マンゴーをシロップに漬けこんだものをピーチとなづけて、日本に暮らすわたしの両親へのお土産によくもたせてくれた。それはたしかに、黄色いもものかんづめを思わせるものだったけれど、温帯とはくらべものにならない強い陽気をためこんだ果肉に、マンゴーらしさをほとばしらせている。暖房のついているリビングルームで明るすぎる蛍光灯に照らされ、すこし居心地がわるそうにもみえるとはいえ、どこまでもそれは熱帯からのどうどうとしたプレゼントだった。日曜日にパートナーが電話をかけてくると、父は英語でお礼を伝え、母は日本語しか話さないのでわたしが英語に通訳した。かたわらでは、アテナがメキシコの人形で遊んでいた。

日本語がつらい

わたしは、この本を日本語で書いている。それは、わたしの母語[1]で、わたしが生きているかぎり、わたしの存在から切りはなすことができない。わたしは、それがつらい。赤ちゃんのときから、つらい。それが、母乳とともに与えられたことが、つらい。わたしは、乳房を口に含むことしかできなかった。それが、わたしの生まれおちた社会からルールと価値をともなって、与えられたことがつらい。わたしは、日本で、日本語が使われる学校にかようしかなかった。すくなくとも、高校までは。それは、そこでは国語として教えられていた。母は国語の教師でもあった。それは、わたしの宿命だった。わたしたちは、そんなふうにして、ある言語環境に生まれおちる。

わたしは、日本語を話すからといって、生命をおびやかされたことはない。日本語を話すからといって、ばかにされたり、わらわれたりしたこともない。日本語を話すからといって、故郷を追われたこともない。あなたの日本語は、正しいとか、間違っているとか、言われたこともない。日本語を話すからといって、勉強することや仕事を探すことがむずかしかったこともない。日本語を話すからといって、そこに居ないようにあつかわれたことも、ない。日本語を話すからといって、アパートを借りられなかったこともない。日本語を話すから、愛することはできないと告げられたことも、ない。ただし、

---

[1] 「トーヴェ・スクットナブ・カンガス(Tove Skutnabb-Kangas 1981)は、母語を、①起源（origin: 最初に習得した言語)、②能力（competence: 最も熟知している言語)、③機能（function: 最も頻繁に使用する言語)、④内的／外的アイデンティティ方向づけ（internal/external identification: 自分自身も他者からも母語であるとみなされる言語）の四点から定義づけ、このうちのいずれかが当てはまれば母語といえる」とした（奥野由紀子編著. 2021. 『超基礎　第二言語習得研究　SLA』くろしお出版、110-111）. わたしにとっての日本語は、この四点すべてがあてはまる。

これらは、現代の日本で日本語を第一言語とする日本国籍者として暮らしていて、の話である。

わたしは、「隣人の言語」を話せない。それは、たとえば、韓国語であり、中国語であり、アイヌ語であり、琉球諸語であり、さまざまな手話である。それは、たとえば、クルド語であり、トルコ語であり、ミャンマー語であり、ベトナム語であり、ベンガル語であり、モンゴル語であり、ネパール語であり、ポルトガル語である（わたしはスペイン語がわかる）。それは、たとえば、クメール語であり、パキスタンの諸語である。それは、たとえば、インドネシア諸語、タガログ語とビサヤ語以外のフィリピン諸語である（わたしはタガログ語とビサヤ語がわかる）。英語以外のさまざまな言語たち。わたしは、これらの言語が話せないからといって、責められたことはない。

わたしは、日本語がつらい。それは、日本語が好きであるとか嫌いであるとかという話ではまったくない。それは、よく見る夢に似ている。ガラス張りの開放的な図書館のなかに、どういうわけか自分ひとりしか居なくて、図書館のなかではいくらでも自由に動き回れるにもかかわらず、美しい庭に出ることがどうしてもできない。窓は開かないし、扉のかぎは見つからない。ふしぎの国のアリスが穴に落ちたときのように。自分自身がふたりいるふりをして、いっぽうがもういっぽうを励ましたり、お説教したりしても、どうにもならない。わたしはひとりしかいない。わたしの声はだれにも届かない。でも、まって。これは、わたしだけの孤独なのだろうか。

フィリピンは、英語の国？

「わたしの本が届きました、アリス、がんばります」

メッセンジャーで送られてきた写真には、「介護福祉士　実務者研修テキスト　全文ふりがな付き」全五巻がたたみの上に広げられ、「沖縄人材カレッジ　Okinawa Jinzai College」の文字がハイビスカスの花をかこむロゴ付きのトートバッグとともに写っている。写真の送り主は、クラリス。二十九歳、フィリピン人、那覇で介護労働者として働いている。メッセージの前半はビサヤ語で書かれており、後半は日本語で書かれていた。あとから動画も届いた。「てぃんぬさぐ花」をうたっている。ギターを弾けるけれど、三線も楽しんでいるようで、すこしほっとする。

フィリピンの南にあるミンダナオ島の都市ダバオで、初めてクラリスに会ったとき、わたしは二十八歳で、彼女は二歳だった。わたしは海岸沿いの「不法占拠地」に暮らす「貧しい人びと」の生活について社会科学的な調査をおこなおうと意気込む博士課程の院生だった。東京大学の経済学研究科に籍を置き、奨学金をもらい、アテネオ・デ・マ

ニラ大学のフィリピン文化研究所に留学し、だいたいのことはうまくいっていると信じていた。すくなくとも、わたしの自意識においては。わたしは英語ができるし、ビサヤ語も語学学校で習った。でも、じつのところ、わたしは現地では、からだだけ大きい赤ちゃんのようなものだった。

クラリスは正真正銘の赤ちゃんで、好奇心が強く、近所で飼われている闘鶏用のニワトリを追いかけていっては迷子になり、おかあさんのクララやおとうさんのロイに厳しく叱られていた。そういうとき、クラリスは、わんわん泣いたあと、目をくりくりさせながら、どんなニワトリだったのか、ニワトリが何をしていたのか、ニワトリに何をしてあげたのか、ニワトリのひと（おそらく飼い主）が何をしゃべっていたのか、ものすごいいきおいでおしゃべりした。それは、当時のわたしには、「ぜんぶがギリシア語」＝ちんぷんかんぷんだったけれども、それはわたしがまだビサヤ語の世界に迎え入れられたばかりの赤ちゃんだったからだ。わたしは、クラリスよりもちっちゃかった。ことばらしいことばが出る前で、手足をばたつかせるばかりだった。

「英語で話したら、窓から放りだしましょうね」
クラリスのおかあさんは、卵の殻をおしりに付けたままの雛のようなわたしに、ゆっくりと言い聞かせた。それは、ビサヤ語だったけれど、本能的に何を言われているか、わかった。わたし、英語でしゃべったら捨てられるのだ、なんてこった。だれも頼る人がいなくなってしまう。とっさに、わたしは眉をあげ、あごを軽くしゃくって、わかりました、おかあさん、と伝えた。音声は出なかったものの、からだはもう新しい言語をおぼえはじめていた。わたしは、どんなニワトリになるのだろう。すこしは飛べるようになるだろうか。チキンのくせに飛びたがるのが、わたしの困ったところだ。

他者を歓待するための言葉

それから、二十七年が経った。
わたしはいま、母校のひとつである、アテネオ大学のゲストハウスに滞在している。マニラ校ではなくダバオ校のほうである。ダバオは、かつて日本からの移民がやってきてアバカ農園などの経営により栄えたものの、第二次世界の開戦、つまり日本軍による侵略、そして日本の敗戦という歴史の流れのなかで、日本人、その子孫（おもに現地の女性との間に生まれた子どもたち）と現地の人びととのあいだに複雑な感情やトラウマを刻み込んだ。生き残った日本人とその子孫は、戦後かなりの時間が経つまでは、抗日運動や差別をおそれて、その出自をかくし、「フィリピン人」として、ひっそり暮らしてきた。

きのう、こちらでお世話になっている神父さまとお昼ごはんを食べたとき、わたしたちは、ビサヤ語でおしゃべりしていた。神父さまはマニラで生まれ育ち、母語はタガログ語ではあるけれど、ダバオで長く暮らしていて、こちらの地域共通語（リンガ・フランカ）であるビサヤ語もふつうにしゃべる。とはいえ、このとき、神父さまがビサヤ語をしゃべっていたのは、タガログ語よりもビサヤ語のほうがはるかに上手いわたしという他者を温かく迎え入れるために、ごく自然にそうなっていたのではないだろうか。神父さまは、叔父さまから聞いたという日本軍による残虐行為を、わたし個人を責めるではなく、ただ、忘れてはならないこととして語り伝えてくださった。

いま、わたしが、ダバオの街をひとりで歩いていると、ひとりで歩いていることを気づかうローカルの住民が声をかけてくれることがある。「痩せているね、もっと食べなさい」。ビサヤ語である。わたしの反応が薄いと、もう一度、「痩せているね、もっと食べなさい」。今度は、タガログ語である。外国人は、地域共通語であるビサヤ語よりも国語であるタガログ語[2]のほうが通じると考えているから、そうなる。えーと、なんて反応したらいいのか、と困っていると、「痩せているね、もっと食べなさい」。さらに、英語でフォローがはいる。二十七年前のわたしだったら、むっとしていた。容姿にコメントしてくるなんてありえない。知らないひとが、と。

いま、わたしは、知っている。さまざまな言葉によるシャワーは、わたしへの歓待のサインあり、神様からの祝福そのものなのである。わたしは、ここで、外国人だからといって、いきなり身分証明書の提示を求められたり、職務質問を受けたりすることはない。ジープニーに乗っていて、わたしのことをなんとなく避ける人もいないし、むしろ車内はガラガラなのに、わたしの隣の席におさまり、ごく自然にからだをのばしてくる。わたしのからだもローカルモードとなり、自然に力が抜けてのびていく。坂にさしかかり、乗客のおばあさんが持っていたドリアンが床に転がって、わたしの足の小指を傷つけても、サンパギータの妖精のように微笑んでいられる。

「ご近所の子」[3]、アリス

---

[2] フィリピン諸語のうち、マニラ首都圏を含むルソン島南部を中心に話されている言語で、英語とともにフィリピンの公用語として採用されている。憲法に定められた国語はフィリピノ語であるが、これは実質的にタガログ語と同じであるととらえてよい。

[3] 「ご近所の子」とは、わたしのなかで「グローバル人材」と対置される存在のありようである。「グローバル人材」とは、文部科学省の概念整理によると、概ねつぎのような要素を含む。①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー。この他、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メデ

日本生まれ、日本育ち、複数の言語のはざまを生きているアリスの物語を書いてみたい。わたしにとってこうして本を書くということは冒険なのだけれど、複数の言語のはざまを生きてきたということそのものは、冒険とはかけはなれている。むしろ、アリスというニックネームを、亡きパートナーがわたしに付けざるをえなかったのは、わたしには「日常の決まりごと」から外にでることを極端におそれるところがあって、「朝食前にありえないことを六つ信じてみよう」と言われても、「ありえないことは信じられないから、そんなことはできない」と生真面目に答えてしまい、「まだまだお稽古がたりないね」とかわいそうがられる始末だったからだ。

アリスというペルソナを立てるのは、もうひとつ理由がある。複数の言語を話し、複数の文化のあいだを行き来している、それもいま（マッチョな日本社会で女性の）研究者として働いているというと、なんだかとても前向きで頑丈で、いろいろな条件や機会に恵まれて「勝ち上がってきた人」なのだろうなと思われてもしかたがない。そういう「履歴書」的なものとはべつに、わたしは精神疾患とともに生きていて、その背景にはトラウマがあり、それはとくに生育環境やいくつかの人間関係にかかわっている。この本を書くことで誰かを傷つけてしまうことは避けたい。だから、アリスというペルソナをかぶり、出来事や実在の人物をある程度、ファンタジックに書きたい。

アリスは、わたしよりも、だいぶ勇気がある。好奇心も強いだろう。わたしと似ているところも、少なくともふたつある。ひとつは、本人なりにとても礼儀正しいところで、どんな存在にたいしても、上とか下とかではなく、ともかく丁寧に接しようとする。もうひとつは、なんでもばかみたいに素直に信じてしまうことで、相手がジョークをとばしたり、ナンセンスでからかったりしているときでさえ、いったんは完全な信頼心をもって相手の世界に吸い込まれてしまう。本人は生真面目なだけなのだけれども、まわりからみると、なにかとんでもなく、ずれているところがある。ときには、まわりをとまどわせたり、不快にしたりしてしまうことがある。

ィア・リテラシー等をもった人材のこと（文部科学省『グローバル人人材の育成について』https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf, 2024 年 6 月 11 日最終アクセス）。また、総務省によれば、グローバル人材とは、「日本人としてのアイデンティティーや日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・ 積極性、異文化理解の精神等を身に付けて様々な分野で活躍できる人材」（総務省『グローバル人材育成の推進に関する政策評価』https://www.soumu.go.jp/main_content/000496468.pdf, 2024 年 6 月 11 日最終アクセス）。

アリスは、複数の言語を話し、複数の文化のあいだを行き来しながら生きているからといって、言語や文化をめぐって常に動いている世界「ぜんたい」について想像力が及んでいるかというと、それはまったく不可能である。アリスは、ときどき米国やフィリピンに行くけれど、それは極めて限られた場所ばかりだし、ふだんは東京に暮らしていて、白うさぎのあとを追って穴に落ちるような冒険とはむしろ無縁と言い切っていいほど決まりきった日常を送っている。アリスは、物理的に遠い距離を移動しているようにみえて（東京からボストンとかダバオとか)、いったんどこかの街に到着したら、そのあとは歩いていける範囲でしか動きたがらない「ご近所の子」なのである。

だから、アリスの語ることは、世界「ぜんたい」のことではまったくありえない。アリスが語れることは、アリスというたったひとりの存在が経験している「ありふれた日常」に限られていている。でも、だからこそ、そこに世界のありようが現れるかもしれない。アリスはアリスの世界であり、アリスと世界とはひとつ、かもしれない。

ちょっと話がずれてしまったが、「ご近所の子」アリスが、そのちっちゃな、それでいて境界が現れたり消えたり霞んだりする彼女の世界を旅するときに使っている言語は、日本語、ビサヤ語、英語の三つである。複数の言語をきれいに使い分けているというよりも、ときには混ぜこぜに、ときにはひとつだけ、ときには流れるように、ときにはぎこちなく、それらを使いながら、彼女は息をしている。それはもはや、日本社会においても、めずらしい在り方ではないだろう。

アリスは「ふつうのマルチリンガル」である。そういう話をしてみたい。マンゴーの樹の下で、銀杏の樹の下で、春楡の樹の下で。ゆっくりと。

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo
Waka Aoyama

0 Prologue
Becoming Alice in the Philippines: **In a Land Where Multilingualism is Commonplace**

Mango in a Tokyo Kitchen

I was leaving for the Philippines tomorrow and I was eating a mango. It was a Thai mango. It was orange rather than yellow, and slender. Sliced along the flabby seed, I cut a lattice of slices with a spoon, scooped a few pieces, and popped them into my mouth. My daughter, Athena, hardens.
Better than Philippine mangoes, yuck."
"Are you comparing the taste of mangoes or something?"
“With Mexican and Indian friends. We would play to see which country has the best mangoes.”
“There are apparently more than 500 different kinds in the world, so there's no way to compare them."
“You know, of course, we're just messing around."

We were speaking in Japanese. Mango. Even though I was in Tokyo, my body was reminded of this. The sticky air clung to my skin, and I could feel the common fruit sold by the kilo on the streets of Davao. In this neighborhood of densely built houses along the coast, there is a small chapel and a large mosque, and the Visayan and Maranao languages connect and divide the people. What does Athena's body remember? She is being cared for by her relatives in Manila. Street vendors are not allowed in the residential area surrounded by high walls. We eat a fruit basket in the over-air-conditioned dining room. Athena speaks neither Visayan nor Tagalog. She speaks English with his cousins.

My name is Alice. It is a nickname given to me by my late partner. In the Philippines, we usually call each other by our nicknames. We call each other by our nicknames so much that we forget that they are nicknames, so that we can almost say that they are the names by which we live in society. Nicknames are sometimes within the range of one's real name, and

sometimes not. For example, it is easy to see that Christine is Ting. It was not obvious to me that Jose was also called Ting (as opposed to Pepe or Jojo). However, the fact that my nickname is Alice has nothing to do with my real name. My nickname Alice has nothing to do with my real name, only with the fact that my partner's favorite author was Lewis Carroll.

My partner used to give me mangoes soaked in syrup and called them "peaches" as gifts to my parents in Japan. They reminded me of yellow peach cherries, but with a flesh that was more mango-y than the temperate zones. It was a gift from the tropics, albeit one that looked a little uncomfortable in the heated living room with its overly bright fluorescent lights. When my partner called on Sunday, my father thanked him in English, and I translated into English since my mother spoke only Japanese. In the background, Athena was playing with a Mexican doll.

Japanese is hard for me

I am writing this book in Japanese. It is my mother tongue[4] and cannot be separated from my existence as long as I live. It is hard for me. It has been hard for me since I was a baby. It is hard that it was given to me with mother's milk. I could only take the breast in my mouth. It is hard that it was given to me with rules and values by the society in which I was born. I had no choice but to attend a school in Japan where Japanese was spoken. At least until high school. It was taught as a Japanese language there. My mother was also a Japanese teacher. It was my destiny. That is how we are born and fall into a certain language environment.

I have never been threatened with death because I speak Japanese. I have never been ridiculed or ridiculed because I speak Japanese. Nor have you been forced to leave your homeland because you speak Japanese. You have never been told that your Japanese is right or wrong. You have never had difficulty studying or finding a job because you speak Japanese. You have never been treated like you don't belong there just because you speak Japanese. I have never been denied an apartment because I speak Japanese. Nor have I been told that I

[4] Tove Skutnabb-Kangas (1981) defined a mother tongue in terms of (1) origin (the first language acquired), (2) competence (the language one knows best), (3) function (the language one uses most frequently), and (4) internal/external The definition is based on four points: (1) competence (competence: the language one knows best), (2) competence (competence: the language one knows best), (3) function (function: the language one uses most frequently), and (4) internal/external identification (language considered by oneself and others to be one's native language). Super Basic Second Language Acquisition Studies: SLA, Kuroshio Publishing, 110-111). For me, Japanese fits all four of these criteria.

cannot love someone because I speak Japanese. However, this is all based on the fact that I live in modern Japan as a Japanese citizen whose first language is Japanese.

I do not speak my neighbor's language. It is, for example, Korean, Chinese, Ainu, Ryukyuan languages, and various sign languages. It is, for example, Kurdish, Turkish, Burmese, Vietnamese, Bengali, Mongolian, Nepali, Portuguese (I understand Spanish). It is, for example, Khmer and Pakistani languages. It is, for example, Indonesian languages, Filipino languages except Tagalog and Visayan (I understand Tagalog and Visayan). Various languages other than English. I have never been criticized for not being able to speak any of these languages.

I have a hard time with the Japanese language. It is not about whether I like or dislike the Japanese language. It is similar to a dream I often have. Somehow I find myself alone in an open, glass-walled library, and although I can move around freely in the library, I am unable to go out into the beautiful garden. I can't open the windows, and I can't find the key to the door. It is like when Alice in Wonderland fell into a hole. I pretend that there are two of me, one encouraging the other, lecturing the other, but it doesn't matter. I am alone. No one can hear my voice. But wait. Am I alone in this loneliness?

Is the Philippines an English-speaking country?

“My book has arrived, Alice, and I will do my best."
The photo sent by messenger shows all five volumes of "Care Worker Practical Training Textbook with full-text furigana" spread out on a folded bed, along with a tote bag with a logo bearing the words "Okinawa Jinzai College" surrounded by hibiscus flowers. The sender of the photo is Clareysa. Twenty-nine years old, Filipinx, and working as a care worker in Naha. The first half of the message was written in Visayan, and the second half in Japanese. A video was also received later. She sings "Tinsagunu-Hana”. I was relieved to see that she can play the guitar, but also enjoys playing the sanshin (Okinawan guitar).

When I first met Clarice in Davao, a city on the island of Mindanao in the south of the Philippines, I was twenty-eight years old and she was two. I was a doctoral student eager to conduct social scientific research on the lives of the "poor" living in "squatter settlements" along the coast. I was enrolled in the Graduate School of Economics at the University of Tokyo, had a scholarship to study at the Institute of Filipino Culture at the Ateneo de Manila University, and believed I was doing mostly well. At least in my self-

consciousness. I speak English and learned Visayan in language school. But in reality, I was like a baby with a big body.

Clarice was a true baby, curious, and would get lost chasing the neighbors' cockfighting chickens, and would be severely scolded by her mother Clara and father Roy. On such occasions, Clarice would cry and then, with her eyes rolling back in her head, she would talk with great gusto about what kind of chicken it was, what it was doing, what she had done for it, and what the chicken (or perhaps its owner) was saying to it. It was all Greek to me at the time, but that was because I was still a baby who had just been welcomed into the Visayan language world. I was smaller than Clarice. I was just flapping my arms and legs before I could even speak a word.

If you speak English, I'll throw you out the window."
Clarice's mom slowly told me, as if I were a baby chick with eggshells still attached to my hips. It was in Visayan, but I instinctively knew what she was saying. If I spoke in English, I would be thrown away. I would have no one to rely on. I immediately raised my eyebrows, stroked my chin, and said, "Okay, Mom. Although no sound came out, my body had already begun to learn the new language. I wondered what kind of chicken I would become. Would I be able to fly at least a little? I am a chicken, but I want to fly, and that is my problem.

Languages for Hospitality

Twenty-seven years have passed since then.
I am currently staying at the guesthouse of the University of Ateneo, one of my alma maters. I am not staying in Manila, but in Davao. Davao was once a prosperous place with the arrival of Japanese immigrants and the management of abaca plantations, etc. However, the beginning of World War II, the invasion by the Japanese military, and then Japan's defeat in the war, left a complex emotional and traumatic impression between the Japanese, their descendants (mainly children born to local women), and the local people. The surviving Japanese and their descendants are the most important victims of the war. The surviving Japanese and their descendants, until quite some time after the war, lived in secrecy as "Filipinos," concealing their origins in fear of anti-Japanese movements and discrimination.

Yesterday, when I had lunch with a priest who has been helping me here, we were chatting in Visayan. Father was born and raised in Manila, and although his native language is Tagalog, he has lived in Davao for a long time and speaks Visayan, the lingua franca of the region,

quite fluently. However, the reason why Father was speaking Visayan at that time was probably because he was warmly welcoming me, a stranger who speaks Visayan much better than Tagalog. Father did not blame me personally for the atrocities committed by the Japanese military, which he had heard about from his uncle, but simply told me about them as something that I should not forget.

When I am walking alone in the streets of Davao, I am often approached by local residents who notice that I am walking alone. You are so skinny, you should eat more. In Visayan. When I do not respond well, he says again, "You are skinny, eat more." This time in Tagalog. This is because foreigners think that Tagalog[Filipino] [5], the national language, is more understandable than Visayan, the regional lingua franca. When I was at a loss as to how to respond, I was told, "You are skinny, you should eat more." He followed up in English. Twenty-seven years ago, I would have been upset. It was unthinkable that someone would comment on my appearance. A stranger, I thought.

Now I know. The various verbal showers are a sign of hospitality to me, a blessing from God itself. I am not suddenly asked to show my ID card or questioned because I am a foreigner here. In fact, even though the car was empty, they sat down next to me and stretched out their arms very naturally. My body also entered the local mode, and I naturally relaxed and stretched. Even when we reach a hill and an old lady's durian rolls onto the floor, damaging my little toe, I can't help but smile like a Sampaguita fairy.

Alice as a Neighborhood Child[6]

---

[5] Filipino is one of the Philippine languages spoken mainly in the southern part of Luzon Island, including the Manila metropolitan area, and has been adopted as an official language of the Philippines along with English. Although Filipino is the national language as stipulated in the Constitution, it is considered to be practically the same as Tagalog.

[6] Neighborhood children" are, in my opinion, the counterpart of "global human resources. According to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology's conceptualization, "global human resources" generally include the following elements. (1) language and communication skills, (2) initiative, positivity, a challenging spirit, cooperativeness and flexibility, a sense of responsibility and mission, and (3) cross-cultural understanding and Japanese identity. In addition, human resources with a broad range of education and deep expertise, problem-finding and problem-solving skills, teamwork and leadership (bringing together groups of heterogeneous people), a sense of publicity and ethics, and media literacy (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, "Fostering Global Human Resources" https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf, last accessed June 11, 2024). According to the Ministry of Internal Affairs and Communications (MIC), global human resources are "people who can play an active role in various fields by acquiring rich language and communication skills, independence and positivity, and

I would like to write a story about Alice, who was born and raised in Japan and lives between several languages. Writing a book like this is an adventure for me, but the fact that I have lived between several languages is far from an adventure in itself. My late partner was forced to give me the nickname "Alice" because I have an extreme fear of going outside the "routine," and when he said to me, "Let's believe in six impossible things before breakfast," I replied, "I can't believe in impossible things, I would respond earnestly, "I can't do that because I don't believe in impossible things," and he would feel sorry for me and say, "You still have a lot of practice to do.

There is another reason for the persona of Alice. If I am speaking multiple languages, moving between multiple cultures, and working as a researcher (a female researcher in a macho Japanese society), one might assume that I am a very positive, robust person who has been blessed with various conditions and opportunities and who has "won". Apart from such a "resume," I am living with a mental illness and have a background of trauma, especially related to my upbringing and some of my relationships. I don't want to hurt anyone by writing this book. Therefore, I want to take on the persona of Alice and write about events and real people in a somewhat fantastical way.

Alice is much braver than I am. She is probably more curious than I am. There are at least two things about Alice that are similar to mine. One is that she is very polite, in her own way, and tries to treat all beings politely, not in a superior or inferior way. The second is that he believes in everything with a foolishly honest attitude. Even when the other person is cracking jokes or making fun of him or her with nonsense, he or she is absorbed into the other person's world with complete trust. Although he is only serious, to those around him, there is something outrageous and off about him. Sometimes, this can make the people around him or her confused or uncomfortable.

Just because Alice speaks multiple languages and lives between multiple cultures, it is impossible to say that she has any imagination about the world at large, which is constantly moving in terms of language and culture. Alice sometimes travels to the U.S. or the Philippines, but only to a very limited number of places, and she lives in Tokyo, where her

---

a spirit of cross-cultural understanding, based on a deep understanding of Japanese identity and Japanese culture" (MIC, "Global Human Resources Development Policy Assessment on Promotion of Global Human Resource Development, https://www.soumu.go.jp/main_content/000496468.pdf, last accessed on June 11, 2024).

daily routine is so routine that she is not involved in adventures such as following the white rabbit down a hole. Alice is a "neighborhood girl" who seems to physically travel great distances (from Tokyo to Boston or Davao), but once she arrives in a city, she only wants to move as far as she can walk.

Therefore, what Alice tells us cannot be about the world "as a whole" at all. What Alice can talk about is limited to the "mundane everyday life" that she alone experiences. But that is why the world may appear to be what it is. Alice is Alice's world, and Alice and the world may be one.

A bit off topic, but the three languages that "neighborhood girl" Alice uses as she travels through her tiny, yet hazy world whose boundaries appear and disappear are Japanese, Visayan, and English. Rather than using multiple languages neatly, she sometimes mixes them up, sometimes just one, sometimes fluidly, sometimes awkwardly, as she breathes them. This is no longer a rare occurrence in Japanese society.

Alice is a "normal multilingual". That's the kind of story I want to tell. Under the mango tree, under the ginkgo tree, under the spring elm tree. Slowly.